アトモスフィア

生化学会は何処へ行く
—ある随想—

山川　民夫*
*本会名誉会員

私は本誌70巻（1998年）11月号の「ばいお・ふぉーらむ」に「ある老生化学者との対話」という題目で，“生化学”からの惜別を表明したつもりだった．ところが先月の生化学誌企画委員会に顧問の資格で出席したところ，新任の市川委員長の提案で西暦2000年を記念する企画として巻頭言の欄を設けることが了承され，私にお鉢がまわってきた．私は平凡な人間で特別な意見の持ち合わせもなく辞退申し上げたが，やむを得ず新委員長に協力するつもりで筆をとったことをお許し願いたい．

日本生化学会は，私が東大医学部の生化学教授の頃は使命感もあって最も大事にしていた学会で，私の論文のほとんどは *J. Biochem.* に掲載して来た．したがって生化学会には，今でも少なからず関心を持ち，心配もしている一人ではある．ただ最近は年次大会や関連するシンポジウムに出席しても研究内容の進歩が激しく，理解が困難な発表が年々増えてくるのは，慶賀すべきことではあるが多少淋しい思いもある．それらの知識がどこまで拡がり深まって行くのか，空恐ろしい気がする．

欧米の国際的な学術商業雑誌同士の競争のあおりも受けて，生化学の研究方向もやや偏っているように思う．現代の多くの若手の生化学者の興味は激しく移り変わるDNA・遺伝子を中心とする分子生物学にあり，新しい知見を集積することに夢中である．その結果，旧来の生化学者たちは戸惑いというか．一種の懐疑を抱くのもやむを得ない．

私が現役であった30年前から，生化学の行き詰りを予見していた人はあって，生化学の発展の究極は生化学が亡びることだと発言していた．そのブレークスルーが，分子生物学の到来であったといえよう．高度成長期には皆が同一方向に走る．確かに，ヒトゲノムの完全解読の暁はバラ色の未来を約束するようだ．

しかし，歴史はそう甘いものではないことを教える．それすらも21世紀に出現するであろう新しいバイオサイエンスの分野から見れば，古臭いものになってしまうかもしれぬ．

分子生物学も長年生化学者が発見し営々と蓄積して来た知見の上に築かれたもので，広義の生化学の一分野であり対立するものではない．それらの知識は生化学の教授陣が，若い学生たちに教えて来たオーソドックスな基礎的事項から産み出されたものであり，いたずらに世間にもてはやされるトピックを講じて学生をエキサイトさせることも必要だが，教育内容のバランスを考えることも肝要と思う．ある大学院生がある酵素のクローニングについての自己の研究発表を行った際，審査員の教授からその酵素の機能について質問されて答えられなかったという話は，教訓的である．

研究方法についても，広く深く基礎的手技をマスターしてそれらを自由に駆使することによってのみ，次代の研究者による優れた成果が期待されよう．

学問にも流行があり，大きな潮流に押し流されて自己を見失ってしまうこともあり，また文教政策に携わる為政者の安直な思惑によって，研究には光と影が生ずる場合もある．大きな研究予算に群がる研究者の心情はいつの時代にも見られることではあるが，ひそかに自由な発想で胎動を続けている地道な若者の新しい研究の芽を摘むようなことがなければよいと思う．

それもこれも，古き良き(？)時代がまだ残っていた頃に育った老生化学者のノスタルジックな繰り言とお許し願いたい．